



地域の取り組み 広島市安佐南区

防災冊子「なんとなく不安だけど、なにもしていない子育てママへ」

子育て・サークル応援グループMaMaぽっけ 代表 坂本 牧子

安佐南区というまち

私たちの暮らす広島市安佐南区は、市内中心部より1時間圏内という生活しやすい場所に位置しています。

全人口比では、安佐南区内に約20%に対し、4歳以下では約25%の子どもが住んでいるという、多くの子育て世代が暮らすまちです。

安佐南区には、中学校13校区に対して、地域子育て支援拠点は、3か所、どこに住んでいても気軽にいつでも行けるという環境ではないかもしれません。その半面、地域の支援者が中心となり運営する子育てサロン(33か所)や、子育て中の親子が中心となり運営する子育てサークル(33か所)の活動が活発に行われている地域です。特に子育てサークルについては、昭和50年代より「地域ぐるみの子育て運動」と題して、区社会福祉協議会がサークル活動を支援下さり、私たちはそんなつながりの中で発足したサークルを卒業した先輩ママによるボランティアグループです。

広島市8.20土砂災害

私たちメンバーと子育てサークルで活動している多くの親子は、3年前の平成26年8月に、「広島市8.20土砂災害」を体験しました。あの日、広島県内で大気の状態が非常に不安定であり、夜から明け方にかけて広島市を中心に猛烈な雨が降りました。平成26年8月は平年の2倍を超える多雨であったため、地盤の緩みが進んでいたことや、局地的、わずか2時間で200ミリを超える猛烈な雨により、広島市安佐南区・安佐北区の住宅地周辺の山が崩れて土石流が発生し、甚大な被害をもたらしました。自然豊かな美しい風景が、一晩で変わってしまったショック、大きな被害のあった地域に暮らす友人、知人、そして、小さな子どもさんをもつお母さんたちのことを思い、どうしたらよいかわからずに呆然としたあの日の朝のこと、忘れることはできません。

災害という非常時に私たちのできること、それはいつもの活動の延長線上にありました。この度は災害後の「子育てサークル応援活動」の取り組みから、子育て世代向け防災冊子“ママの防災ぽっけ”作成について報告させて頂きます。

もしものときに子どもを守れるだろうか

災害直後、私たちはまず、区内33子育てサークルに向けて、土砂災害が日常のサークル活動に支障をきたしていないか? アンケートをとりました。局地的な災害であったということもあり、被害のない多くの地域のサークルからは、「いつもとかわらない」という回答が戻



ってきました。そんな中、被害の大きい地域の3つのサークルからは、「活動をお休みしている。いつ再開できるか? わからない」「メンバーが減っていく。このまま、サークルが消滅したらどうしよう」という声が、また、被害のある近くの地域のサークルさんからは、「何も備えをしていないという不安、もしものとき、我が子を守ることができるだろうか?」という声が届きました。

災害から1か月後頃は、行政は被災地支援業務が中心となり、地域で定期的に行われていた健康相談室や、地域の人たちによる子育てサロンも休止しました。日常の子育ての不安を相談したり、親同士でいろんな気持ちを語り合ったり、子どもを安心してあそぼせることがむずかしくなる地域もありました。そんな中、お母さんたちからこんな声も聞こえてきました。「被災された方たちのお気持ちを思えば、今はがまんしないとイケないとき…」災害1か月後、不安でいっぱいな時をお母さんたちは過ごしていました。

子育て世代の防災講座

当時、私たちにできることは、親子で集い、たわいのないおしゃべりをしたり、子どもたちが安心してあそべる場をつくることでした。活動が休止してしまっている3つのサークルさんたちと一緒に交流会を企画したり、災害後の不安な気持ちをみんなで話そう!という機会を私たちは計画しました。どちらの機会も、たくさんの親子さんが集い、おしゃべりの輪が広がりました。不安な気持ちを語り合う中で、お母さんたちは、子育て世代の防災について学びたいと思うようになり、その気持ちを

私たちは公民館さんや区社会福祉協議会さんに伝え、そして、一緒に子育て世代向け防災講座としてカタチにすることができました。

どんな講座にしたいか？「防災に関心のある人は、もう何か準備をしたり、講座に参加したりしているはず。私たちが参加してほしいのは、なんとなく不安だけど、日頃の生活のことで目いっぱい何から取りかかったらいいかわからずにいる人と、お母さんたちは動き出しました。「ママの防災ぼっけ」のサブタイトルでもある「なんとなく不安だけど、なにもしていない子育てママへ」は、実は、はじめて開催した子育て世代向け防災講座のキャッチフレーズでもあったのです。

そして、次のステップとして「講座で学んだことをたくさんのお母さんたちに伝えたい！」「日常の活動の中で、ちょっと関心をもって足をとめてもらえる展示物を作りたい！」と、「ママたちの防災知恵袋コーナー」が完成し、日頃の活動や、イベントの一角で多くの人にみていただくチャンスとしています。

3年の活動をカタチに

その後、私たちは「国際ソロプチミスト広島8.20土砂災害復興支援金」を頂く機会をいただき、3年間の活動を冊子にまとめるという大きな挑戦をすることになりました。災害後不安な気持ちを語り合い、学びあい、広めたいと集まってくれたお母さんたちと一緒に作成することにしました。

防災についての資料や書籍、ネットでも知ろうと思ったら、いくらでも情報はあふれています。そんな中で、私たちの作る冊子って、どんな役割を持つのだろう？私たちが届けたいのは、「なんとなく不安だけど、何もしていない子育てママへ」なのです。また、いろんな冊子やパンフレットがある中、捨てられない冊子、いざというときに開いてもらえる冊子、そんな思いがたくさん詰まった表紙が出来上がりました。「保存版」という太い文字は、お母さんたちが考えた捨てられないためのアイデアです。

さあ、次はお母さんたちの防災への思いをどう言葉にしていくか？冊子を作るなんてはじめてのことなので、文章にしていくのは大変です。「やっと文章にして、思いはまとまったけど、こんなに文字いっぱいだったら、きっと私は読まないだろうなあ〜」思いが伝わる表現って…？イラストで目に入ると伝わりやすくないかな？イラストが得意なお母さんが思いを絵に表現してくれました。

また、いざという時に大切な我が子を守るって、どんなことなのだろう？みんなで頭を悩ませながら、私たちは「寝る」「あそぶ」「食べる」という3つのポイントで、私たちの思いをまとめることになりました。「あそぶ」については、これまでサークル応援活動として紹介してきた身近なものであそびが、じつはいざというときにも役立つものであり、それは昔ながらのあそびであったのです。「おんぶ」についても、昔から日本に伝わる技が実はとっても役立つことをあらためて知ることが

できました。便利な世の中だから、忘れられてしまう大切なこと、私たちはあらためて感じることができました。

地域を知ることが減災につながる

広島県では、「災害に強い広島県」をめざし、“「みんなで減災」県民総ぐるみ運動”が展開されています。「危険を知る」「情報を察知する」「避難する（行動する）」「学ぶ」「備える」という5つの行動目標を参考にまとめていきました。

その中で、まず、自分が暮らしているまち、地域について、知っているようで知らないこと、知る機会がなかなかないことに気づきました。「ハザードマップって？」ハザードマップで地域の川や山の危険を知ることができること、「生活避難所って？」まずは、我がまちにある避難先についての様々なマークを、近所を散歩して探してみることを紹介しました。

そして、過去にあった災害について、石碑として遺されているということ、住んでいるまちのことを知ることが大事な減災につながるということを私たちは冊子づくりを通して知ることができました。3年前の土砂災害の慰霊碑、昭和初期にあった大きな水害の慰霊碑、どの石碑にも、その時の地域の人たちの思いや願いが込められていました。若い世代にまちの歴史を伝承していきたいという地域の人たちの協力のおかげで、私たちはこのページを仕上げることができました。

人がつながり助け合えるまちを願って

私たちは出来上がった冊子を人から人へ手渡ししていくことを大切にしています。手に取ってくださった地域の支援者の方は、「お母さんたちの不安な気持ちを始めて知ることができた」と話してくださいました。お母さんたちの思いを地域の人に届けることができたことは、「MaMaぼっけ」として何よりも嬉しいことです。その思いのひとつである食物アレルギーをもつ子どもたちの存在、お母さんたちの思いは、地域防災への取り組みに活かせるよう一歩ずつですが地域の中で動き出しています。

私たちは、この冊子づくりをとおして、地域の子育て支援活動で何を大切にしたいのか？あらためて考えるチャンスをいただきました。今は、子育て支援という名の子育てサービスがたくさん展開されています。人と人が出会い、語り合い、ちょっと面倒かもしれないけど、つながりをつくっていくこと…「どうしてる？」「元気！」「大丈夫？」と、声をかけてもらえる人との出会い、つながりづくりができにくい世の中になっているのかもしれない。

住んでいるまちを知ること、誰かとつながること、それがいざという時に大きなチカラになること、私たちは地域の中で、これまでどおり変わることなく子育てサークルというひとつのツールを使い、多くの親子が地域とつながり、いざという時に助け合えるステキなまちになることを心より願い活動を続けていきたいと思っています。